

Summer Art School 2008

このスクールはひとりひとりが創造的に人生を生きるために

「学ぶ場」としての各種アート・ワークショップ（体験工房）を提供すると共に、

障害の有無やさまざまな状況を超えて創造するプロセスの中で、

それぞれ異なる感性や創造性を分かち合い、

学び合うことによって新しいアートの可能性を探ります。

目次

■サマーアートスクールレポート

絵本の主人公になって描く いとうひろし・・・5
創造性を引き出す音楽づくり

ヴォルフガング・ハートマン・・・15

サウンド・エデュケーション 鳥越けい子・・・30
内なることばを語る、紡ぐ 上田假奈代・・・63

■ディスカッション

学校と地域の架け橋を求めて

↳教育、そしてサウンドスケープの視点から↳

鳥越けい子×佐藤学・・・43



内なることばを語る、紡ぐ POETRY WORKSHOP

講師◆上田 假奈代

闘う詩人・詩作家。3歳より詩作、17歳から朗読を始める。ことばと声を人生の味方につけよう」と呼びかけ、活動を行なっている。1996年から障がいを持つ人や高齢者、一般社会人、親子、若者など幅広い対象にむけて詩のワークショップに取り組む。異ジャンルとのコラボレーションやトイレ連込み朗読、寝ところが詩朗読など、独自のリーダーイング・スタイルを展開。2003年大阪フェスティバルゲートの cocoroom の運営をはじめ。NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)代表、言葉合同会社代表。

心の中に耳をすまし

言葉を紡ぎだす

詩をつくるというと、とかく難しいのではと考えてしまいがちです。このワークショップの参加者達も初めは詩をつくるということに対して緊張した面持ちでした。しかし、上田さんのワークショップはひと味違いました。「まずは寝ころがって朗読を聞いてみましょう」という『寝ころが詩』から始まり、相手をじっと見て浮んでくる言葉を詩にする『似顔詩』など従来の技法とは違う、新しい試みが繰り出されるに従って、自然と緊張がほぐれ、いつしか自分の中に、そして相手の中に隠れている言葉を見つけ出すおもしろさに夢中になっていきました。

言葉を探る

■活動紹介

蝉の声が聞こえる会場に、着物姿で現れた上田さん。その姿はどこか涼しさを漂わせています。

ワークショップは上田さんの3つ々の活動体験談から始まりました。

「私が障害を持つ方々と初めてワークショップを行なったのは、今から8〜9年前で、視覚障害の方々でした。そのグループは中途視覚障害の10〜20代の若者4人で、施設の発表会で武田鉄也の『贈る言葉』を歌いたいということでした。私はこれを発表作品とするには、歌詞から誘い出される自分の気持ちを言葉にして重ね合わせて長い朗読作品にしたらいいのでは、と思ってワークショップを行いました。

『暮れなずむ街の光と影の中〜』という歌詞を朗読している時に、光を失ってしまった彼らがよりよくなってなぜこの曲を選んだのかを考えて、込み上げてくるものがありました。

4人の参加者は、初めは緊張からか、ずっつとおしゃべりをしていたり、逆におとなしかったりといったようすで、ひとりの方は首を90度に曲げて、ずっつとつむいていました。私は彼が声を出せるだろうかかと心配しましたが、みなさんのハミングが彼を温かく励ましたのでしよう、少しずつ首が上がってきて、とても小さな声でしたが、自分のパートの歌詞を声にしました。とてもすばらしかったです」

上田さんは後に施設の職員の方に今まで反発的な行動が多かった彼らが、このワークショップを境に、積極的にリハビリに参加するようになるなど、日常的な態度が変わった、という話を聞いたそうです。

職員から「あなたは彼らに何をしましたか？ あなたは魔女ですか？」とも言われたそうです。

「おそらく彼ら自身が目が見えなくなったりという事実を受け止め始めた時、たまたま自分の気持ちを声にし、耳で聞くというワークシッ

プがあり、彼らなりに思うところがあつたのではないかと思えます。

その後、2ヶ月間ワークショップを続け、彼らは自信を持つて発表しました。



同じく視覚障害を持つ方々とのワークショップで『子供の頃好きだった場所を語る』というエクササイズをやった時の話ですが、ひとりの女性が『話したくない』と頑なに話すことを拒んだのです。私はその人の肩に手を置いて『無理して話すことはないよ』と言いながらも、とても残念な気持ちだったのですが、仕

方ありませんでした。でも数日後にその女性が職員さんをつかまえて、自分の好きだった場所について、わーつと話したというのを聞いて、ワークショップの時間内で話すことができなくても、ちゃんと持ち帰ってくれているんだと感じました」

さらにもうひとつ彼女の体験を話してくれました。

「知的障害を持つ子供との詩のワークショップでの出来事ですが、初日に私が会場へ行くと、ひとりの女の子が自分の周りにカバンの中身を並べて箸をつくっていたんです。どうやら母親に無理矢理連れてこられたようで、ワークショップが始まってからもなかなか参加しなかったんです。でもお題を決めてみんなだて詩をつなげてつくる連詩というのをやった時に、彼女にお題をもらおうとお願いしたら、『モー娘』と言われたんです。一瞬『エッ』と思いました。私が『きょうのお題は『モー娘』です』と言うと、みんな書き始めました。彼女は自分の順番